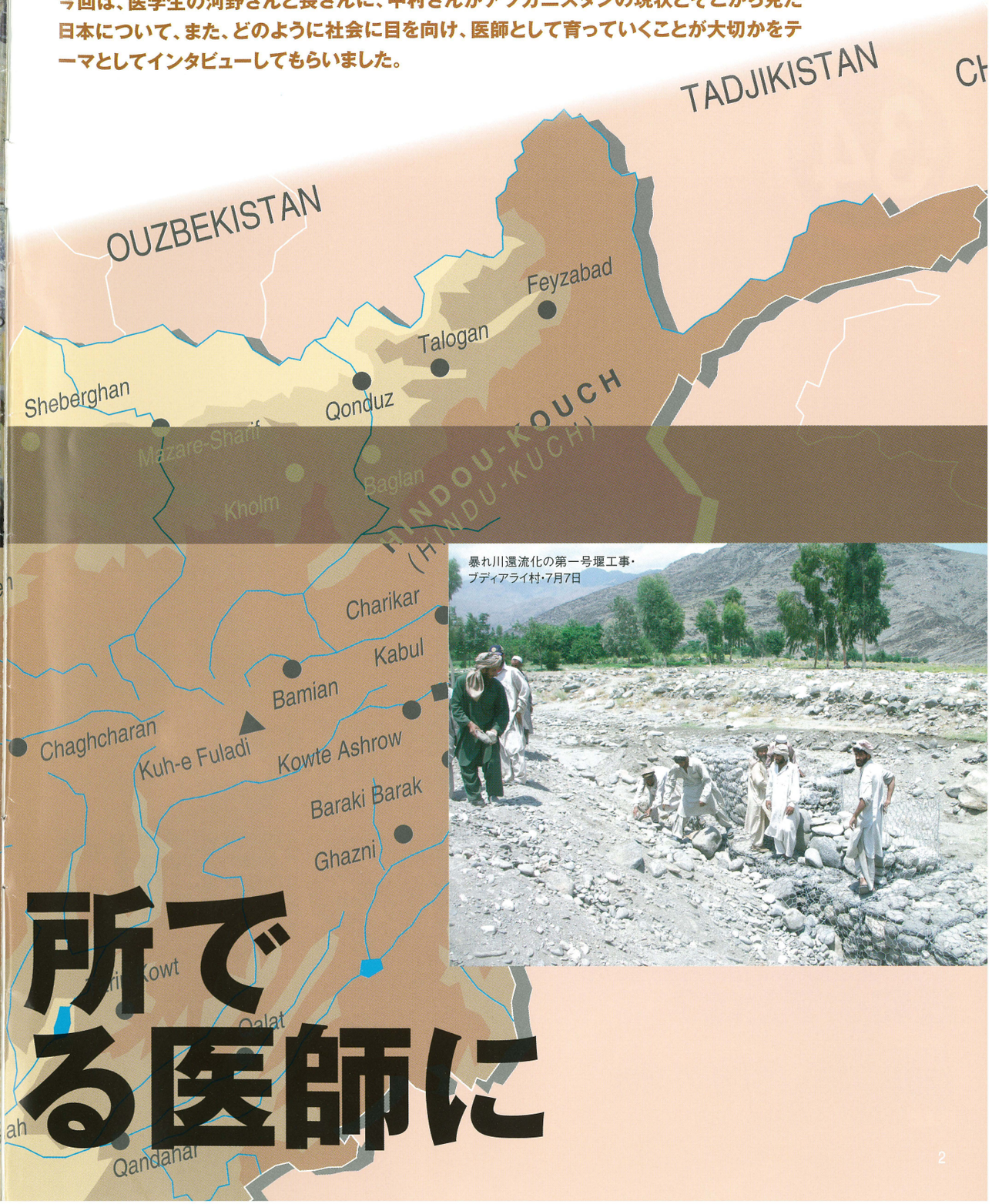
今でも戦闘が続くアフガニスタン。追い討ちをかけるように、地球温暖化のため砂漠が広がり、難民が増え続けています。この地で医師として働く中村哲さんは、現地の人々が続けてきた自給自足の生活を取り戻そうと、水源・灌漑事業も積極的に行っています。中村さんは、日本の政治・経済もアフガニスタンの抱える問題に影響を及ぼしているのだといいます。今回は、医学生の河野さんと長さんに、中村さんがアフガニスタンの現状とそこから見た日本について、また、どのように社会に目を向け、医師として育っていくことが大切かをテーマとしてインタビューしてもらいました。

中村哲 profile●ペシャワール会現地代表。PMS（ペシャワール会医療サービス）総院長。1946年福岡市生まれ。九州大学医学部卒。専門＝神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の診療所勤務を経て、1984年パキスタン北西辺境州の州都のペシャワールに赴任。ハンセン病を中心としたアフガン難民の診療に携り現在に至る。主な著書に『ペシャワールにて』『ダラエ・ヌールへの道』『医は国境を越えて』『医者井戸を掘る』『辺境で診る辺境から見る』（石風社）『アフガニスタンの診療所から』（筑摩書房）『ほんとうのアフガニスタン』（光文社）『医者よ、信念はいらない まず命を救え!』（羊土社）など

特集 Interview

中村 哲先生に聞く

必要とされる場所で必要に応えられる医師に



暴れ川還流化の第一号堰工事・ブディアライ村・7月7日

『最近のアフガニスタン情勢』

長　最近のアフガニスタンは、日本のメディアに取り上げられる事が少なくなって、よく分からないのですがどのような状況でしょうか？

中村　だんだん、悪くなっていますね。政治的な動きだけ見ると総選挙があったり、政権が何となく安定してきたような印象を与えていますけども、実際は、人々の暮らし、それから政治面でもあまりよくなったとは言えない状況というのが、現地の普通の人の見方じゃないでしょうか。どういう事かというと、米軍がいる限り今の政権は持つだろうけど、米軍が引き上げると数日と持たないだろうというのが現地の一般的な人の捉え方ですね。今、米軍は1万8000人常駐しているのですが、アフガニスタン空爆の直後が1万2000人なので、その後、約6000名の増員ですね。イギリス軍が4000名増員、それから、NATO軍が数千名の規模でさらに増員されることが決まっていて、ということは、そんなに軍隊が必要なのかということですね…。とくにアフガニスタン東部だとか、元タリバン政権にあった人たちの、抵抗がずっと根を張るように続いているのが現状なのですね。だから、戦闘地域はむしろ拡大しているといえます。確か今年の米軍の死者が、具体的な数字は忘れましたが、数百名規模で戦死しているはずです。米兵がそれくらいで、米兵が沢山死ぬと（米国内で）反戦運動が起きてくるので、代わりに米軍の傭兵を使うんですね。傭兵に戦わせるというのが普通で、その数を入れると千人規模で毎年戦死者が出ているのですが、その事実は報道されないか、報道されても散発的な報道なので、世間にはよく伝わってないでしょうね。外国人が集まる都市は、首都カブールだけなのですが、これは、アフガニスタンの中では、非常に特殊中の特殊地域というべきで、そこの映像ばかり出てくるわけですね。アフガニスタンは、9割以上が普通の農民ですが、その人々が住んでいる地域の実情がなかなか伝わらないですね。

河野　今、先生が話された事を、新聞やテレビ報道などで目にした事があり、日常的に人々が集まるのはカブールだけと聞いたのですが、カブールはどのように変わったのですか？

中村　カブール市内は、随分変わっていますね。変化するのが、いいのか悪いのかは別にして、インターネットカフェができたり、学校教育なども一見立派な校舎で充実してきている様に見えますけど、片方では、きらびやかな風俗がはびこったり、きらびやかなことが悪いわけではないですが、今までが今までだけにコントラストが極端なのですね。田舎に行くと本当に質素で、一ヶ月に日本円で4000～5000円あれば一家が生活できる国なのですが、カブールは物凄く物価高な町になってしまって、何倍もの基本物価の値上がりがあって、その分だけ庶民は苦しくなったというのが実態です。その証拠に、空爆が終わった直後に、パキスタン在住のアフガニスタン難民が約250万人いて、空爆が終わってから1年の間に、170万人をアフガニスタンに帰したのですが、80万人になったパキスタンのアフガン難民が、今はなんと300万人いるのですね。これは、アフガニスタンに帰った人が、再びパキスタンにUターンしたのです。これは空爆直後に、アフガニスタンに戻れば衣食住が補償されるという強力な政治宣伝があって帰った人々が多かったのですが、ところが帰ってみると職はない。しかも、300万人の難民というのは、殆どが『干ばつ避難民』といいますか、大半が、自給自足の村の生活が普通ですから、そこが干ばつでやられて食えないので都市に流れて行く、そして都市で食えないので、また、パキスタンの方に『出稼ぎ難民』として出て行くということなのです。そのような、人が、かえって増えているというのが現状なのです。だから、僕らとしては、干ばつ問題、干ばつ対策というのが最優先されるべきで、教育も政治も大事ですけれども、まず、生きていかないと教育も政治も無いわけです。ということで診療所も開いてはいますが、水源事業・灌漑事業を中心にやっているわけです。今も、難民は増え続けているのです。そして、干ばつも治まる見通しがないという、私が経験した中では一番悪い状況ではないでしょうか…。

『国際化・国際医療の陥穽（かんせい）』

河野　医療状況についてお聞きしたいのですが。一番必要とされる医療とかは。

中村　それはなかなか説明しにくいんですね。日本みたいな医療組織があるわけでもないし、保険があるわけでもない。無医地区が普通であると考えていいですね。医者がいるところを数えたほうが早いというのがアフガニスタンですね。日本の場合は無医地区といっても交通機関が発達しているので、何かあったらヘリコプターで連れて患者さんを運んだり、救急車で運んだりで、少なくとも一日かければ行けないところはないですね。ところが向こうは交通機関が整備されてないので、徒歩で来ざるを得ない。1週間から2週間かかるというのはザラにあるわけですね。そうすると、病気になっても「もう、仕方がない」と諦めざるを得ないという地域が、全部とは言わないまでも、ほとんどですね。その代わりに薬局。ちょっと大きなバザールには薬局がありますから、薬局がその役目をある程度、果たすというのが普通ですね。例えばマラリアにかかって寒気がする、熱が出る。「ああ、マラリアですね」と言って薬を渡すというのは、薬局がやるんですね。

河野　現地のお医者さんというのは大体、都心部に集まるんですか。

中村　そうですね。これも日本と同じなんですね。

カーブルの診療所にて
ハンセン病患者を診る
（2002年3月頃）

分水路に育つ柳

医者はけっして少ないとは言えないけれども、どうしても都心部に集まってしまって、僻地に行きたがらないですね。私たちも相当苦労しまして、僻地診療に行くと手当てを増やしたりとか、色々な優遇措置をしたりして努力しましたけれども、ほとんどが行きたがらないですね。露骨な言い方をすると、開業したときに儲かるような技術を身につけると、そのまま「僻地の病院よ、さらば」というケースが多いですね。これは日本と非常によく似ている。

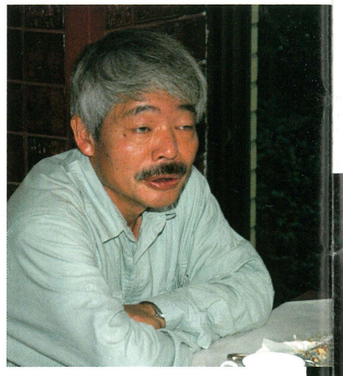
河野　アフガニスタンに行って、こういう活動を始めようと思ったきっかけみたいなお話を聞きたいんですが。

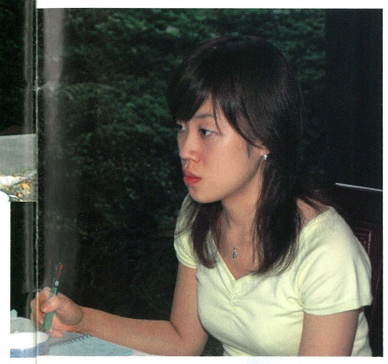
中村　これは「犬も歩けば棒に当たる」といいますか、それに近いものがあって、国内でもよかったんですね。今、東北地方なんかは医者が足りなくて外国人の医者を入れるとか、深刻な状況になっていますけれども、九州でも離島がある長崎県とか鹿児島では医者が足りないのではないですかね。福岡県でも都心部を離れますと、山の中は無医地区ですよ。地域で頑張っておられた開業医の先生たちが老齢化して、後を継ぐ人がいないんですね。しかも以前は市町村立の病院というのがありましたけれど、それがどんどん潰れていく。また、そこに行く医者も少ないということで経営がうまくいかない。悪循環ですね。さらに医療予算が削られるという駄目押しみたいなことがある。日本でもそういったことで、われわれの働く場所というのは沢山ありますけど、これはやっぱりきっかけというものがあって、僕はどこでもいいと思うんですね。岩手県に行こうが、長崎県の離島に行こうが、アフリカに行こうが、それに都心部だって困っているところがあるんですね。例えば外国人労働者が多い横浜とか、ああいうところは本当に困っているのに、医療が受けられない外国人労働者が沢山います。こういう診療所なんかで働くというのも一つの大きな医療協力というか、医者としての立派な働きと言うべきでしょうけど、どういう場所で、どういう形で働くかというのは、出会う人と状況で決まっていくというのが現実でしょうね。

私、海外医療協力という言葉があまり好きでない。というのは、国際化だとか国際交流だとかいうのは、やはりこれは大きな世界的な流れの中で日本も諸外国と協力しなければ生きていけない世界になったんだという一種の危機感というか、認識が意図的につくられたという感じがしないでもない。意図的というのは言い過ぎかも知れませんが、例えば日本全体の色々な今の動きですね。外国との合弁会社ができる。そして大きな資本といいますか、多くのお金を持っているところが小さいところを呑み込んでいく。こういう過程の中で、日本も日本という枠組みだけにとどまっていては経済が回らない、という背景の中で国際化というのが出てきたのは明らかなんですね。ホンの15年前まで海外医療協力というのは、変人が行くところだと思われていたんです。もちろん立派だとは、皆さん思いますけれども、「あそこまでしなくたって、日本でも困っているところがあるんだから」というのが、よくも悪くも、普通の意見だったんですね。その中で、国際化というブームが意図的につくられたんではないか。いろんな国際資本が合併して統廃合されていくと、グローバリゼーションというんですか、意地の悪い言い方をすれば「グローバル化の一環として国際医療というのも登場した」と言えないこともない。だから私が嫌いなのはその点で、日本国内でも困っているところは沢山ある。医者として働ける場所というのは、別に外国でやっていくのが必ずしもいいことではないということですね。むしろ地味なところ、目立たないところに困っている人が沢山いるわけで、そういうところで働いている人は、僕はえらいと思いますよね。

長　先生が言われたように海外で働くなら、地元にあるような文化とか、そういうものをあまり考慮しないで、自分たちの文化だけ持ち込んで、そこの文化を侵襲するような協力の形になっていることには気をつけなければいけないと思います。長崎県の離島なり海外なり、どこでもいいとおっしゃる、その背景。そのためには共通して持っておかなければいけないものと思います。

中村　そうですね。それが共通したところですね。もちろん外国だから差が顕著ですけれども、日本国内でも風土差というのは随分あるんです。この福岡県内でも。私は日本に帰ったときは実は非常勤の医師として家族を養っているので、何カ月か働くんですね。八女というところがありますが、私は福岡市内の生まれで北九州市育ちですけれども、言葉が随分違うんですね。おじいちゃんが診察に来る。そして地元の言葉で話すんですね。私は頭が専門ですから「じいちゃん、頭痛は少しはいいね」と聞くと、「おろいたか」と言うんです。「おろいたか」というのは、もっと痛くなったという意味なのかと思うと、そうではなくて、痛いのが少し減ったという意味なんですね。そういうふうに日本でも違うわけ。あるいは地域によって農村が中心であったり、あるいは都市と半分半分であったり、あるいは町のど真ん中とか、場所によって随分違うわけですよね。人々の生活意識も違うわけで、それに合わせるというか、患者さんの状態を知った上で診療するというのは、実はアフガニスタンでも日本でも同じなんですね。例えば糖尿病の治療でも医療技術は同じでも、100人おれば100通りの治療があると言っても差し支えない。相手に応じた説明の仕方、相手の日常生活に受け入れられるようなサジェスチョンというのが必要ですね。例えば僕らが勤務していて、特に卒業し立ての内科の先生が来ますね。ある患者さんが、血糖値が高いので、一応、糖尿病としての治療を受けなくてはいけない。「そのためには毎日、散歩を30分やってください。定期的に血糖検査をして」というサジェスチョンをしますけれども、それから食べ物も糖尿病食が大事であるということで、カロリーが少なく満腹感のあるもの。リンゴはいいとか、ミカンは案外、カロリーが高いとか、お年寄りに説明しても、分からないんですよ。私はそこでは長いものですから、患者さんが私のところに来て「内科の先生から毎日30分、歩きなさいと言われた。それで先生が言われたことだからと思って忠実にそれを続けておったけれども、自分の畑は家から歩いて30分くらいのところにあるので、往復するのに1時間かかる」と。そこで働くわけですね。そして「帰ってから散歩したか」と聞かれるから、それは守らなくてはいけないと思って、それからまた散歩をするそうです。そうすると、くたびれて、続けられない。それも内科のお医者さんが患者の生活状態を知っていれば、「それだけ働いているなら大丈夫ですよ」と、これでいいんですね。オフィスでじっと座って仕事をしている人たちに対しては、そう言うべきでしょうけど、相手の生活をあまり知らずに治療しようとすると、そういう破目になるんですね。それは極端な例ですけれども、似たようなことは日本でも外国でも同じだということなんですね。





河野　先生がなされている水源事業とか医療活動とかいうのは、すごく難しいというか例えば自分で行っても、できることではないと思うんですが。

中村　しかし、そのつもりになって腰を落ちつけてやれば、恐らく歓迎しないところはないでしょうね。どれくらいの時間をかけてやるか、ですね。数カ月いろんな交渉があったり、慣れないこととかあるかも知れませんけれども、時間をかけて腰を落ちつけてやれ

ダラエヌール試験農場にて

ば、決してできないことではないんですね。ただ、水がいかに重要なものであるかという認識が外国人の側にあまりにも薄いということでしょうかね。例えば、なぜ、難民がそんなに発生するのか。別にタリバン政権の政治的な迫害が原因ではなかったわけですね。みんな食えないから逃げてきたわけですね。またカブールでどんな政権が出来ても、地方というのは、中央とは全く別個に生きている世界なので、極端に言えばソ連が来ようが、アメリカが来ようが、われわれの生活には関係ないという生活ですね。だからちょっと私たちがイメージする近代的な国民国家とは随分違うところだというのが、よく分かってもらえないですが実情ですね。ただ、アフガニスタンへ来る外国人は、その実情がよく分からないので、勝手に裏切られた気持ちになったり、助け甲斐のない人たちだということで疲れて帰っていくという人が少なからずありますね。

長　水の必要性、重要性を認識していないところが多いというのは、例えばどういうことですか。

中村　外国人は道路の修復、学校の建設や教育、いわゆる近代国家にふさわしい体裁を整える事業には熱心ですけれども、自給自足の農村地帯の集合がアフガニスタンであるということの認識があまり知られてなくて、まず、知らないということが大きいでしょうね。それから邪推すれば、意図的としか取れないようなこともある。例えば世界食糧計画WFPですね。ワールド・フード・プログラムというのが膨大な予算を持って色々な飢饉の事態とかに小麦粉を運んだりしているんですね。しかしあれだけの予算があれば、どうして灌漑水利事業に手を付けないのか。例えば数千トンの小麦をこれこれの地域で何十万の人々に配りましたという広報がされますけれども、それだけのお金をかけてみんなに分ければ、極く僅かしか残らないわけですね。例えば2千トン、われわれは内戦中にカブールに送ったことがありますが、輸送費も何もかも入れて日本円にして約1億円くらいかかった。ところが灌漑事業をすると、今の灌漑予定面積は5千ヘクタールなので、1ヘクタール当たり4トンの小麦ができるんですね。つまり年間2万トンの小麦ができる。しかも自給自足で。だから当初はお金がかかりますけれども、水さえ供給すれば、あとは自分たちで自立してやっていく。

河野　今後の展望というか、どうしていったらいいのか。働きかけとかは。

中村　やはり、どうして難民が出るのかというのを訴えかけていって、もちろん、いろんな政治問題もありますけれども、本当に普通の人々、外国人を喜ばせるような都市生活者ではなくて、本当に田舎にいる9割以上の農民、遊牧民たちが何を考えているのかというのを汲み取って、その人たちが生計を立てていかれるような支援をすべきだと思います。この干ばつ問題というのは、恐らく元には戻らないだろうというのが私たちの認識で、悪くはなるけれども、よくなることはないだろう。波はあっても年々悪くなってきている。それは、アフガニスタンに私が入って十数年間、雪がだんだん減ってきているからなのですね。昔、流れていた川が、今はカラカラの涸れ川になっている地域も沢山出てきている。ということは十数年かけて少しずつ進行してきた水欠乏が、5～6年前から降雨量が少ないということで一挙に表に出てきたわけで、その背景には明らかに地球温暖化というのがある。そういうことを考えますと、今、炭酸ガスの排出量を完全にゼロにしても、回復するのに50年以上はかかるそうですね。ということは何百年間は砂漠化というのは続くのではないか。考えてみると怖いことで、今、アフガニスタンが直面している危機は、農地の砂漠化ですね。耕作地域を広げるという段階ではないんですよ。もう、防衛の段階になっている。それが年々ひどくなってきている。そのあたりでみんなが一致して協力できるものがあるはずだと思うんですね。それがなぜか「自由とデモクラシー」だとか。デモクラシーが悪いとは思いませんが、今、それを言わなくたって、まず生きてゆくのに困るというのが実情ではないでしょうかね。だから、この干ばつ問題については、それに気づいて灌漑事業に力を尽くすというところも稀れに見られるようになってきましたが、まだまだ知られていいのではないかと思うんですね。外国人が入ってくる時は、「こんな遅れて野蛮なところを近代化してやろう」という奢りが見えないわけではない。しかしわれわれが見ている限り、教育水準の高い人ほど人間的に卑しい人が多いですね。お医者さん然り。少しでもお金が多いところにスッと移っていくとか。それよりも、お金も全然ないような人たちのほうがまだ純朴で、いいですね。「貧乏がいい」とは言いませんけれども。だから、きっと教育の中身なんでしょうね。

『日本の選択と覚悟』

灌漑用井戸

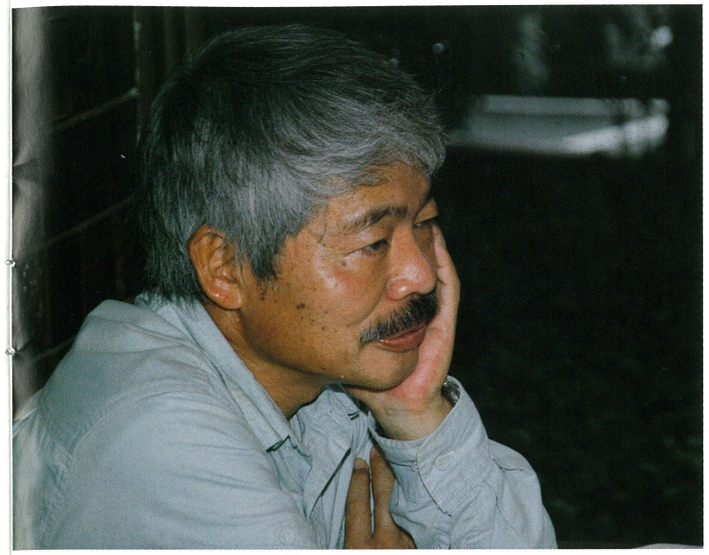
河野　憲法9条のことについて先生は新聞などで発言をされていますね。9条を変えるという方向に確実に向かっていると思いますが、そのことについては。

中村　これは恐らく日本そのものが破局の入り口にさしかかっている証拠だと私は思いますね。これは飛躍するようですが、日本は持ちすぎる国になったという根を下ろしている。その結末であろうというふうに思うんですね。というと、ちょっと飛躍するようですが。羽振りのいい経済を維持するためには、大国に習って国益を守らなくてはいけないという、何となく戦前に似たようなムードが広がっているというのが、一つあると思いますね。これは非常に危険なことであって、同じような道を日本が歩んでいるということ。これはそう長くは続かないだろう。日本国民はその選択をしつつあるということなんでしょうね。そこまで言うと嫌がる人がいるかも知れませんが、実態はそうではないでしょうかね。もうちょっと分かりやすく言うと、多少、人殺しをしても自分たちが食っていければいいんだという意識が少しずつ芽生えてきて、育ちつつある。われわれ医療人として、アフガン空爆のときに簡単に米軍の支援をしたりというのは、ちょっと耐えがたいんですよね。理解しがたいんですよね。その上でアフガン復興ということは、自分たちと似たような感覚の経済化を押しつけることになるし、建て直しだとか、再建だとか言うけれど、これは非常に危険なことであって、その〝錦の御旗〟として登場したのが、自由とデモクラシー。本来は人々の生活を保障して、なるべく平等な社会を実現していこうというデモクラシーが、戦争を正当化する道具に使われるようになった。だからグローバルスタンダードという言葉が登場する。しかし私に言わせれば、人間にとって共通のものというのは国家だとか、羽振りのいい人たちが言うグローバルスタンダードというよりは、みんなが平和に仲よく生活できるということなんですね。そういう点からすると、今の9条改定の動きというのは非常に危険なものがある。いろんな議論があるでしょうが、基本的に私は憲法原理主義者ですね。9条の精神が滅びたら、私は国籍を捨てたい。誇りがなくなるから…。

長　アメリカの後ろに付いていって、それでテロの対象になっているという現在の状況で、ロンドンのテロが

あったときに、「次は東京だ」みたいなことを取り沙汰される中で、これは政治の話になるかも知れないんですけれども、今回の選挙で自民党・小泉政権が大勝したというのは、僕自身、非常に恐ろしいなと思っているんですね。

中村　恐ろしいですね。しかも知識層全体が幼稚化しているんですね。幼稚化という言い方は正しいかどうか分かりませんが、ちょっとした見かけの新しさにパッと飛びつく。行き詰まりを感じたら、新鮮に見えるものに飛びついていく。これが今、非常に危険な状態の背景をつくっていると思うんですね。おっしゃるとおりですね。



長　9条の改定というのが国民の過半数の支持を得て達成されるということになれば、先生の活動に及ぼす影響というのは大きいのではないかと思いますが。

中村　直ぐには来ないでしょうけれども、中東にはまだまだ日本を尊敬する世代が生き残っていますから、「日本よ、お前もか」という失望感くらいで済んでいるものが、次の世代になると、変わるでしょうね。だから、私は憲法9条の改定をする前に、国民投票制度というのがもしあるならば、日本を51番目のアメリカ合衆国日本州とするのか、それとも独立国日本とするのか、というのを、国民投票で決めてほしいですね。昔の軍隊を持っていた時期のほうが日本は羽振りがよかったという郷愁といいますか、ノスタルジアでもって、特に50代、60代の人々は「軍隊を持つ普通の国に」というふうな言い方をしますけれども、それは戦争を体験したことのない人たちなんです。だから自民党の中でも古い人たち、特に野中さん。彼は政治家としてはどうか知れませんが、こと9条の問題に関しては「自衛隊派遣というのは、これは何かのつまづきの始まりだ」と。国会でお話をしたことがありますが、野中さんはそう言われましたね。そして「戦友に申しわけない」と。その記憶が今、薄れつつあるのが実態ではないでしょうか。

河野　先生は戦争体験のお話をされましたが、実際に戦争を体験していない私たちがこれからの社会をつくっていく。でも、体験していないことは、しようがないというか。

中村　体験していないことは、しようがないことで、その人の罪ではないんですが、暴力をふるってまで羽振りのいい生活を守る、この道義的な意味といいますか、道徳的な意味といいますか、これは国民が真剣に考えるべきことですね。われわれは餓死者も出ないような、そして問題はありますけれども、福祉もそこに行き届いて、世界でも稀な長寿国になって、そしてそれなりに豊かな生活を送っている。経済も、まあまあ羽振りがいい。これをさらに活性化すると同時に平和でもいたい、というのはムシのいい話だということです。日本国民としては敗戦直後の状態を考えてみれば、こんなに豊かでなくたって生きていけるわけで、やはり貧しくても平和な道を選ぶという、選択と覚悟が必要でしょうね。豊かさというのは経済がクルクル景気よく回って、お金が儲かるということではないのではないかと思うんですね。それはアフガニスタンに行けば、そう思うわけで、貧しいことはいいことではありませんけれども、日本人よりは幸せな感じがするんですね。日本人は何でもお金に換算して考える。だから食べ物さえ今や9割以上は輸入に頼って暮らしている1億3千万の人口というのは、異常な社会なんですね。自分たちの安全という場合に、それは経済を活発化するという形の安定ではなくて、自分たちの生命にかかわるような事柄を自分たちで守るということではないでしょうかね。そうすると食糧問題だとか、環境問題だとか、いろんなことが見えてくると思うんですね。本当に国際協力というならば、共通する悩みを抱えているところは沢山あるので、環境など協力できるところは沢山あるんではないですかね。

『気立てのいい医者に』

中村　医学部を出てから水利土木をやらなくちゃいけないということではありませんが（笑）、医者には医者しかできない仕事があるわけで、働き場所は無数にあるということですね。ただ、その人が興味を持つところ、出会う人たち、場所、状況で、いつでもそれなりの応答ができるようなお医者さんが沢山育ってほしいというのが私の願いと言えば、願いですね。私は医学生としては劣等生でしたから、特に言うことはありませんが、皆さん、気立てのいい医者になってください。

河野　先生のお話を結構、緊張して構えて聞いていたんですが、先生の「もうちょっと寛容になったほうがいいよ」とか、おおらかな感じを受けてホッとしたというか。すごく親しみを感じることができて…。うまく言葉にならないんですが、本当に先生がしたいから、やっているというのがわかりました。今日はどうもありがとうございました。

中村　したいというよりも、しないと気持ちが収まらないというか、そういうことでしょうかね。難行苦行だけではないですね。もちろん楽しいことも沢山あります。

長　先ほどの患者さんのお話にしても、『患者さん一人一人に合わせた医療を行っていかなければいけない』というお話を聞いて、誠実に振舞うというか、目の前の人を大切にするという姿勢が伺えてとても為になりました。ありがとうございました。

■インタビューを終えて■

河野佳子さん　長崎大学4年

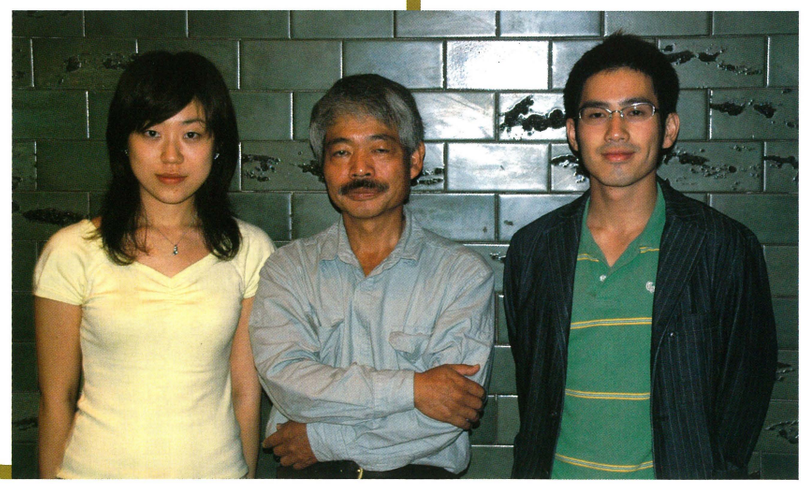
かわのよしこ●大学では茶道をやっています。お金と時間があれば外国に旅行するのが好きです。いろんなことに興味をもって、触れて、感性を磨いていきたいです。患者さんに元気を与えられるようなお医者さんになりたいです。

＜感想＞

中村先生と直接お話をして、先生の人としての『おおらかさ』を感じました。医師として、こんな道もあるんだと、これから先の人生を考えるうえで刺激を受けました。

長哲太郎さん　長崎大学3年

ちょうてつたろう●薬害肝炎訴訟を支える長崎学生の会などの活動に関わってます。アクティブに学生生活を送ることで将来的には、ハートウォーミングな医者になりたいと思っています。

＜感想＞

中村先生は、物腰穏やかにお話され、落ち着いている印象がありました。アフガニスタンで、立派なお仕事をされているのとは対照的に日本での生活は、家庭的な部分をお持ちになっているのに親近感を抱きました。お話になっていた中で、特に印象的だったのはアフガンでの生活が、日本の憲法9条と大きく関連しているということを知り、9条改定が日本だけの問題ではないのだと、大変勉強になりました。最後の先生がおっしゃった、「気立てのいい医者になりなさい」というメッセージの意味は「これは、深いなぁ」と思いましたが、きっと分かる日が来ると信じて頑張っていきたいと思いました。